

平成 26 年 6 月 24 日現在

機関番号：32666

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2013

課題番号：24790521

研究課題名（和文）腕神経叢麻痺の再建法選択における決定分析と費用効用分析

研究課題名（英文）Decision-making and cost-utility analysis of treatment options for brachial plexus injuries

## 研究代表者

小野 真平 (ONO, Shimpei)

日本医科大学・医学(系)研究科(研究院)・研究員

研究者番号：40591243

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000 円、（間接経費） 1,020,000 円

**研究成果の概要（和文）：**外傷性腕神経叢麻痺再建は長期の治療期間・莫大な費用がかかる割に満足のいく上肢機能を獲得することが困難であり、肢切断も重要な治療選択肢の一つとなっている。本研究の目的は、外傷性腕神経叢麻痺の各治療法 { (a) 遊離機能筋移植2回（土井法）、(b) 遊離機能筋移植1回、(c) 上肢切断+肩関節固定、(d) 治療なし } の4種類 } における患者満足度を含めた治療アウトカムを明らかにすることである。

**研究成果の概要（英文）：**Although free functional muscle transfer (FFMT) provides improved functional outcomes, the final result of this procedure is only rudimentary grasp and weak power grip. The purpose of this study is to conduct a decision analysis and cost-utility analysis comparing the following 4 treatment options for brachial plexus injury (BPI): (1) double FFMT, (2) single FFMT, (3) amputation and shoulder stabilization, and (4) no treatment. We will show which treatment option is most cost-effective and which has the most impact on the patients' quality of life.

研究分野：医歯薬学

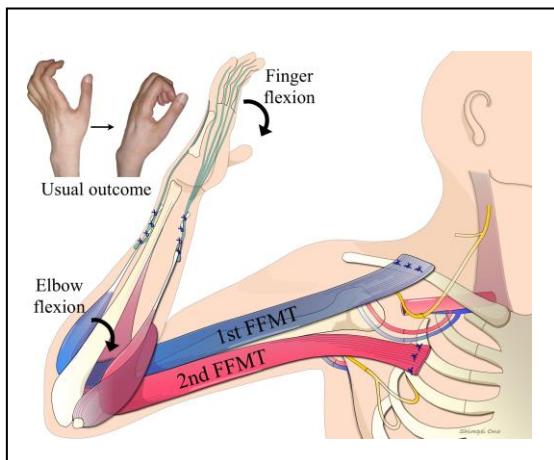
科研費の分科・細目：境界医学・医療社会学

キーワード：腕神経叢麻痺 アウトカム研究

## 1. 研究開始当初の背景

外傷性腕神経叢麻痺の治療法は遊離機能筋移植術(functioning free muscle transfer)による肘屈曲機能再建が主流である。土井らは上記に2回目の遊離機能筋移植を追加することで肘屈曲機能再建だけでなく、手指伸展機能の獲得を可能にしている(図1)。一方で、腕神経叢麻痺再建は長期の治療期間を要し、莫大な費用がかかる割に満足のいく上肢機能を獲得することが困難であり、肢切断も重要な治療選択肢の1つとなっている。各治療法の治療アウトカムを検討した報告は過去に存在するものの、患者満足度を調査した論文は存在しない。

図1. 土井法：遊離機能筋移植を2回施行する



## 2. 研究の目的

外傷性腕神経叢麻痺の各治療法における患者満足度を含めた治療アウトカムを明らかにする。最終的に医者・患者が治療法を選択する際の根拠を明確にすること(=decision making)を目的とする。

## 3. 研究の方法

(1) 本研究における第1段階として、腕神経叢麻痺治療の予後に関するevidence levelの高い論文を適切に収集することが求められる。そのためにはevidence levelの高い論文の検索法、さらに内・外的妥当性の評価法を習得することが求められる。その研究手法を学ぶことを研究の第1段階とする。

(2) 本研究の第2段階は、ミシガン大学形成外科 Kevin C Chung 教授の研究グループと共同でおこなう。腕神経叢麻痺の各治療法は(a)遊離機能筋移植2回(土井法)、(b)遊離機能筋移植1回、(c)上肢切断+肩関節固定、(d)治療なし、の4種類とし、各治療法

のutility(全くの健康を1、死亡を0と設定)を評価するために学生を対象にアンケートを作成しデータを収集する。そのデータをもとに各治療法のQuality-adjusted life years(QALYs)を計算し、各治療法の治療アウトカムを比較する(図2)。

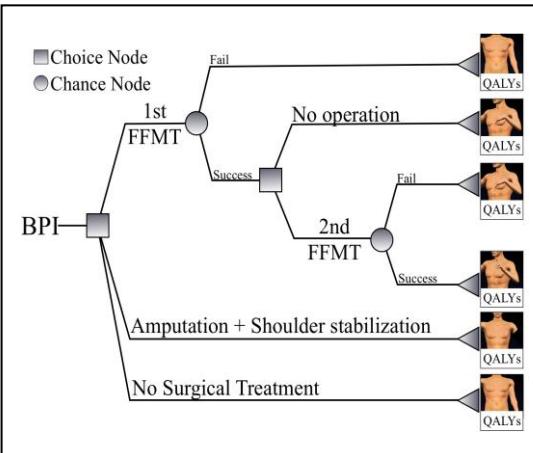


図2. 各治療法の decision-making tree と QALYs

## 4. 研究成果

(1) 予後に関する evidence level の高い論文を効率的に収集し、内・外的妥当性を適切に評価する研究手法を英文教科書、PubMed論文をもとに学んだ。他科領域(循環器科など)ではその手法を紹介した文献が散見されたが、形成外科領域において確認し得なかつた。そのため、形成外科医が日常診療でよく遭遇する下腿開放骨折をモデルケースにして、どのように予後の evidence にアプローチするのか、その研究手法を論文としてまとめた。

(Ono S, Sebastian SJ, Chung KC. Evidence on prognosis. Plast Reconstr Surg 2013;131:655-65.)



2013;131:655-65.)

本論文では32歳男性の下腿開放骨折(Gustilo IIIB)をモデルケースとした(図3)。





## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

1. Ono S, Sebastin SJ, Chung KC. Evidence on prognosis. Plast Reconstr Surg 2013;131:655-65.

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

○取得状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

小野 真平 (ONO, Shimpei)  
日本医科大学 医学部 助教  
研究者番号: 40591243

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号:

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号: